

藤 稔(ふじみのり)

登録番号：第919号

育成者：青木一直

登録年月日：昭和60年7月18日

来歴：「井川682号」と「ピオーネ」

登録者：青木一直（神奈川県藤沢市
高倉830）

の交雑実生

特 性

■栽培特性

4倍体品種で、果房、果粒ともに大きく、紫黒色に着色し、育成地（神奈川県藤沢市）で8月中・下旬に成熟する生食用品種である。樹冠の大きさは大、樹勢は強、枝梢の太さは太い。葉は5角形で3片葉、5片葉が混在し、葉柄裂刻が開いて強健である。花房の形は小副穂型で、花振り性は巨峰ほどでなく、結果樹齢に達するのが早い。成熟期は8月中・下旬でピオーネより約2週間早い。

栽培方法には2通りの方法がある。

一つは普通露地栽培で有核ぶどうの生産である。果粒の大きさが18～22g程度に達し、果房は開花前、副穂および上部の支梗を4～5段除去し、先端部を軽く除去して整形し、摘粒して20～30粒程度とするので300～500gとなる。この方法は萌芽期から開花結実期までの新梢の生育を揃え、樹勢を中庸に導くため、せん定は弱せん定とし、芽掻きによって樹勢を調節し、花振いを防止する。

他の一つはジベレリン処理（25ppm）による無核ぶどうの生産である。果粒の大きさが25～32g程度、果房の大きさが500～700gとなるので、2k箱に3～4房詰めとすると外観が美しくポリウム観がある。開花前、花房の副穂および支梗を上部より切除し、先端部3.0～3.5cm程度の花蕾を残し、満開時（花房の80%開花）をとらえて第1回のジベレリン処理（25ppm）を行なう。この時期が早過ぎても遅過ぎても、果粒の肥大が悪い。第2回目は落花15日～20日後、25ppmにフルメット200倍を混用して処理する。この場合の樹勢は強めがよく、新梢の長さを200cm前後に導き、150cm以下の新梢は空枝とする。せん定はやや強せん定、芽掻きは弱い枝を切除する。

■果実特性

果房は円筒形の大房で300～700g、自然状態では1000g以上にも達する。果粒は短楕円形巨大粒で、18～22g、ジベレリン処理により25～32gに達する。紫黒色で着色は良好。果皮は厚く、裂果は少ない。果皮と果肉の分離は容易、果汁は多く、甘味はやや高（糖度計指数18度）、酸味は中、渋味、香気は無く、風味は軽く、食味は良好である。脱粒性は中、輸送性は良好である。

■病害虫抵抗性

べと病、灰色かび病、うどんこ病、晚腐病およびスリップス等ぶどうの病害虫に対して特に弱いものはなく、通常の防除で栽培できる。

■地域適応性

花振いは巨峰に比較して少なく、着色も容易であるので、栽培は比較的容易で、早生品種であるため、土壌および地域適応性は巨峰より広く、火山灰土壌でも栽培可能。しかし、ジベレリン処理による栽培で樹勢を強く保った場合、ねむり病に注意が必要である。

（吉田賢児）